

詩 感

—現代詩における“難解”の研究—

川 島 清 ・ 鶴 田 恭 子

The Sense of Poetry

—Studies in “the Difficulty to Understand” in Modern Poetry—

Kiyoshi Kawashima, Kyoko Tsuruta

Abstract

What is the meaning of “what is difficult to understand” accompanying poetry, especially modern poetry? Where does the inevitability of the difficulty come from? Does that really originate, aiming at the top level of language?

These are the questions when we comprehend modern poetry. As these problems cannot be solved completely, people taking no interest in poetry have been increasing in number with accelerated velocity today. Losing of poetry (verse) originating from ancient times and situated on the root of language means the crisis of language with its hollow causing the collapse of the consciousness (mind) of moderns. At present various diseases concerning nervous or mental system become serious and this has something to do with these matters, I think. Therefore, verifying “what is difficult to understand,” I want to clarify the essence of modern poetry.

In this main issue, I point out <the inexactness> of realism and I situate the inexact feeling of reality recognized by doing so as modernism (modern science principle). Next, through the views of Masao Kawai, I regard this recognition as the evil of culture, cleaning up the anti-nature attribute and the sense of modeling concealed in modernism.

And the situation evading the problems of modernism, namely the equality, <exactness=anti-nature anti-modeling=anti-modernism> is “what exists before one’s eyes,” which Karatani says and “the shadow” which Yoshimoto demonstrates.

Moreover, dealing with the following, I will conclude my thesis.

Topology of the consciousness common to Karatani and Yoshimoto is “potentiality” which is said to be unreality regarded with realism, from which “the difficulty to understand” originates in consequence. But “the difficulty to understand” has what is overwhelmingly before one’s eyes, and at the same time, as it isn’t thoroughly detached from the consciousness, it is neither <the consciousness which is to be understood> nor <the unconsciousness which is not to be perceived.> It is situated on the touching point of the two consciousness, that is to say, the rear of the consciousness. The sensibility at the rear of the consciousness is the very existence of poetry, namely, the sense of poetry.

By <the sense of poetry> modern poetry overcomes misunderstanding which is said to be the difficulty to understand and displays its significance by drawing closer to original nature.

Keywords: poetry, the sense of poetry, the difficulty to understand, culture, evil, rear, the world of consciousness.

キーワード: 詩, 詩感, 難解, 文化, 悪, 背後, 意識世界

1. はじめに

確かにライトバースの方向に流れているとはいっても、依然として、エズラパウンド、エリオット、オーディン等の影響を受けた“難解さ”は現代詩に脈々と底流しているといえる。

ただ、「難解のための難解さ」を持った作品は別として、加藤典洋に「深海」と言わしめた現代詩のレベルの高さはどこから来るのか。それを本論考によって探してみたいのと同時に、「難解」としてカテゴライズされた、いやむしろ、カテゴリーの外に置かれた詩自体に対し、かなりの〈錯視〉があることを明らかにしてみたいと思うのである。

本論では詩における感性の問題を単なるリリズムの範疇で捉える愚を改めたい。むしろそれを空間的な位置や意識層のレベルで論じ、「誤解された難解」が、いかに必然的なものであったかを確認する。そして慣習化によって判断された難解が、実は“原自然”そのものであったことを開示する。

そこで現代における代表的な詩篇を取り上げ、哲学、詩学、自然人類学等の多角的な視点で究明された、文化形態や認識内容をもとに、それらを分析し、「難解」の真相を明らかにする。そして詩的世界へのさらなる接近をはかる。

詩は文学の頂点に君臨する時代の終焉をむかえ、今やある一部の嗜好家によって愛されるコレクションと化していると一般的には思われている。確かにそのような傾向があることは否めない。だが立ち止まり、熟考することのできない現代社会において、詩のシーンがそのような趨勢をもっていくことも当然の帰結として考えられるであろう。そこで「詩」そのものの意義を見失わぬために、「詩」

そのものがこのような社会に汚染されぬためにも、本論においてその真価と未来への意義を書きとどめておかななくてはならない。

2. 意味の病

詩が「見る」という行為のみならず「生きる」ことを目的とするために、単なるリアリズムの域を時として超えることがあるのは、やむをえないであろう。

当然「見て」認識し統合されるリアリズムを、「生」そのものだと考える人工的な思想は、逆に「生」のダイナミズムに直面し見事に崩壊する。現実の沿革だけを把握することに成功したリアリズムが、「意味の病」に侵される非現実のパラドクスを、どれだけ予想していたのか、はなはだ疑問を持たざるを得ない。

ロブ＝グリエは、この問題をカフカを例にとって次のように述べている。

「彼（カフカ）の小説の中の目に見える世界は、確かに彼にとって現実的な世界だったのであり、その背後に存在するものなど（何かが存在するとしても）、物体、動作、会話等々の明証性と比べると何の価値もないように思われる。幻視的效果は、それらの輪郭の異常な明確さに依頼するのであって浮動やぼかしに由来するものではない。結局のところ、精確さ以上にファンタスティックなものはないのである。」

（ロブ＝グリエ『写実主義から現実へ』）

ロブ＝グリエが言うところの〈精確さ〉は、生を無視することのできない現実の赤裸々な姿であ

り、詩がこの手法を用いたときには、現実から「死」が湧出するのではなく、紛れもない「生」が直立する。ある意味でのこの「生の直立」こそ、形骸化した宗教から逃れ、モダニズムを放棄し、獲得しようとしている現前性といえるであろう。

また、小林秀雄は『ペスト』の中で次のように述べている。

「観察とはすべて事後の観察である。観察によって知る代わりに、生きて知るといふ心掛けで眺めるなら、人生には在りさうにもない事だけが起こっている。」

F. ベーコンの観察を喝破したとも、深化したともとれるこの小林の発言は、的を射たというよりも、ひとつの発見とみることができよう。

T. S. エリオットの「新たなる認識」の秩序は、科学的・宗教的死の側面に向かうのではなく、あくまでも生を直撃するものでなくてはなるまい。よって仮に、生に舵をとったとき、その舳先に、文化的非現実の霧を突き破り立ち現れる大陸は、「在りさうもない」事象の圧倒感であろう。

だが、この「在りさうもない事」が現実において不明確であるがために、現実性を欠くと未熟な速断を下す近代科学の客観性は、確かにポピュレートされている。

しかし、これをポピュレーションやニッチェの問題に置換した場合、大きな錯視を招くことになりかねない。

3. 文化という悪

「つまり長い進化の歴史を通じて、種は固有のニッチェをもってすみ分け、調和のある社会を構築してきたところへ、文化環境という異質な環境を設定し、他種の社会やニッチェを侵害するという結果になるからである。そのことは、いわば、反自然的な進化を持ち込んだと言ってよいだろう。自然は、その中で何が起こり何が消滅しようと善悪

の彼岸にあるものである。しかし文化過程は、その存在そのものが反自然的である限り、自然の中での価値が問われなければならない。文化はプラスとマイナスの価値を含んでいる。あるいは、文化は善と悪とを包摂した両義的体系である。文化を創造することは、すなわちまた生物界に悪の要素を持ち込むことに他ならない。」

(河合雅雄『森がサルを生んだ』)

河合が言うところの“悪”の概念は、吉本隆明の『マチル書試論』における“悪”の認識を左証することにもなる。が、ここではもっと掘り下げ、ポジティブに捉えていかなければならないだろう。

文化には二側面がある。科学とそれに対置する宗教である。二者ともに善悪の概念は存在し、社会的価値を形成する。善悪の彼岸である自然とそれらを有する文化とが弁証化されたとき、自然への悪の導入は防がれる。しかし、科学(近代)は、まだその途上であり、それらは乖離したままで当面二者の一致はあり得ない。また宗教においても、仮にアウフヘーベンされた存在があったとしても、未だ社会的に承認される段階には至っていない。

だが、現在、詩の大多数は反文化にある。これらは科学と宗教の善悪の圏外にあって、特別区を形成しているといつてよい。このことすなわち、詩が自然と同一磁場を共有していると判断するのは危険であるが、文化の中ではより“自然の生”を獲得する可能性を持つと言えよう。(ただしここで言う「自然」とは文化的日常性や科学性にいつさい侵されていない本来の自然、すなわち「原自然」とも言えるものである。)

確かに詩の文言は、善悪の文化から見れば混乱と錯誤に満ちている。また、時には小林が述べた「在りさうもない事」と判断される。しかし、前掲の河合の言葉を借りれば、「自然悪としての文化的ポピュレーション」からの批判は、詩の原自然への接近を反証することにもなる。

古代において、未成熟な宗教に汚染され、近代

において、科学の冷徹さに仮死化された詩。今その仮面が剥がれかかろうとしている。やっと側面的人間から解放され、詩の内的な輝き“人間”への超越が開始されはじめた。詩が渴望してやまなかった“原自然の沃野”、モダニズムの側面から見れば“荒地”に今一步足を踏み入れている。実際、全ての現代詩人が意識しているかどうかは別として、彼らの文化破壊が時には混沌と神秘性に満ちた原自然を顕在化する。後にも掲出するが、秀れた現代詩人たちは、もうこの作業を意識的に行っていると言っても過言ではない。

ただここで詩が開かなければならない閉ざされた門がある。

4. 擬種

「そして地域集団によって文化形態が異なる——つまり様々な文化的ニッチェがあり、そのニッチェに適応したポピュレーションがすみ分けている、という状態が現出した。エリクソンが、人間はいくつかの擬種を持つといったのは的を射た見方である。」 (河合雅雄／著書名・同上)

詩が文化を乗り越え、非文化の文化たり得るためには、それに必然的に具わる擬種の問題を解決しなければならない。

つまり詩の難解さは、擬種を誘発する極めて文化的な行為と位置づけられるということである。柄谷行人は以下のように述べている。

「たとえば夢の中で、仮にわれわれが樹木を見ているようにみえても事実はそのようではない。樹木は見られるべき対象として存在するのではなく、ただ圧倒的にそこに存在する。なぜ樹木がそこに存在するかは問題ではなく、またそれを見ないで済ますこともできないというふうに、絶対的に現前している。われわれはそれに抗うことも対象化することもできない。」

(柄谷行人『意味という病』)

擬種を瞬時に破壊するのは、この存在の圧倒性であろう。その意味においては、知覚における勝利を意味するかのようと思われる。しかしこれは、世界における知覚の体系的日常性に依拠するものではなく、その背後にある〈非一抒情〉の衝撃(和合亮一『瀧口修造に鮮やかな紅梅を充填してみたいのだが』)とも言えるものである。

感受性(日常性)の背後に包摂される非一抒情と、認識(科学性)の背後に君臨する非一認識の衝撃。圧倒的現前性を捉えることのできるものは、どこかで感じていながらしかし従来の合理性や宗教性では絶対に表出できぬ背面。いやむしろ、それらのもので隠蔽され続けた原自然=個の現前的意識に他ならない。文化に塩漬けになった世界観こそ、潜在化されなければならないだろう。吉本はこの背面の延長上の影を捕らえた。

「フランスの象徴派の詩人たちが「象徴」という概念にどんな自覚的な意味を与えていたかわたしもつまびらかにしない。だが結果的な作品をみれば、かれらが言葉の〈意味〉〈価値〉〈イメージ〉という既成概念の上に新しく〈影〉(レプリカ)という概念を付け加えているのではないかと見える。言葉の〈意味内容〉の流れに沿いながら本当は〈意味内容〉の流れが物象の〈イメージ〉とかかわりない〈影〉(レプリカ)の流れを醸造すること。」 (吉本隆明『詩学叙説・続』)

5. 影

影は柄谷の言葉を用いれば「見られるべき対象として存在するのではなく、ただ圧倒的にそこに存在する」ということになる。しかし影を、「見られるべき対象として存在」させないとしたのは原自然ではない。むしろそれは文化である。意識においてもこの影を覚知する〈背面〉があり、吉本も指摘しているとおり、象徴主義の段階では単なるレプリカの存在でしかなかった。つまり結果的存在に他ならなかったのである。まだ象徴主義に

おいて〈意識の背後〉は感得されておらず、よって影は直視されず、ゆえに文字どおり影になりさがっていた。

ところがアンチモダンの時代に入ると、背後がむしろ詩の前面に押し出される。意識の裏から表層を押し上げ解放に向かう。あるがままの原自然が、あるがままであるための運動をするように……。

ここに以上の背面の顕在化を具現した詩を三篇掲出しよう。

I

長い回廊をさまよいながら ぼんやりとではあるが

聖なる戦慄をもってしばしば感じたものだ

わたしは同じ日々に 同じ歩みを

行っている死者、他者であると。

複数の〈わたし〉の そしてただ一つの影を有する

この両者のいずれがこの詩をかきつけているのか。

分割不可能 しかも一方がアナテマであるならば

わたしを何と名ぞそうといいではないか。

(ホルヘ・ルイス・ボルヘス『恵のうた』より)

II

まみよ おもってごらん ぼくと一緒に——パリの空

秋のおおらかな 時を知らぬ女よ……

ぼくらは心臓を花売り娘たちから買った

心臓は青く水中で花とひらいた

ぼくらの部屋に雨が降りはじめた

するとぼくらの隣人〈夢〉氏が やせこけた小人がやってきた

ぼくらはカルタ遊びをした ぼくは瞳孔をとられた

きみは髪をかしてくれた ぼくはそれもとられた

かれはぼくらをうちのめした

かれは戸口から出ていった

すると雨も かれのあとから出ていった

ぼくらは死んでいた でも息をすることだけはできたのだった

(パウル・ツェラン『フランスの思い出』)

III

ぼくの掌から秋はむさぼる、秋の木の葉を——ぼくらは友だち

ぼくらは時を胡桃から剥ぎだして教える——歩みさることを

時は殻の中へ舞戻る

鏡の中には日曜日

夢の中にまどろむ眠り

口は真実を語る

ぼくの目は愛するひとの性器へくだる

ぼくらは見つめあう

ぼくらは暗いところを言いあう

ぼくらは愛しあう 罌粟と記憶のように

ぼくらは眠る 貝のなかの葡萄酒のように

月の血潮の光線を浴びた海のように

ぼくらは抱きあったまま窓のなかに立っている、みんなは通りからぼくらをみまもる——

知るべき時!

石がやおら咲きほころぶべき時

心がそぞろに高鳴るべき時

時となるべき時

いまがその時

(パウル・ツェラン『光冠』)

Iのボルヘスの詩は、シニファントとしての背後、つまり〈裏面の対象化〉を実現している。そしてその圧倒的な現前性は「聖なる戦慄」の語句をもって語られる。

表(わたし)と裏(死者・他者)を主体が移動するのか、表裏が転倒するのかつまびらかではないが、無意化されていた非存在が、意識の地平に立ち現れることは確かである。テキスト中で二者の「不分割」を明記していることから表裏関係の一体感がこの詩の核の一つとして不可欠であることがわかる。またテキストに記されている「影」も一体化のキーワードとしてあげられ、意味を超えた〈意義〉をもつ。実体の無い影に、意識の統合軸として実体以上の存在感、現前的圧倒性が発生する。

だが、統合されたIの詩の安定性に較べIIは実に不安定である。IIの詩の特徴は表裏の分裂にある。換言すれば二者の人格化といえよう。仮にテキストの〈夢〉氏をシュールレアリストと捉えて、この詩を単なる寓意として処理するのもよいだろう。だがここで明らかにしたいのは、その寓意の奥にある〈意識の表裏の問題〉なのである。

つまり、〈ぼくら〉(表層)に隣接する隣人の〈夢〉氏(裏)が〈ぼくらの部屋〉を訪れたとき、裏は表に押し上がる。表(日常的文化)に裏(非文化的原自然)が挑み、前者は潰滅的状况を呈する。覚醒しながら無意識に支配されるという快事が起きる。ぼくらの主体は、〈文化〉に位置するために、非文化から詩人の命(眼)と女の命(髪)が奪われる。実は原自然の生には瞳孔と髪のカテゴリー

は存在しない。そこはモードと化した脆弱な知性と美を破壊する、多次元的秩序の美がある。そして、それを捉えた裏面の感得性を直覚しないがために、〈ぼくら〉は生ける屍と化す。モダニズムの終焉と位置づけられる詩である。

Iのボルヘスの詩が表裏の一体感において認識的であったのに対し、IIIのツェランの詩はそれが詩的イメージとして結晶している。Iのような説得力を持たずとも、ここでは象徴的な一瞬として生々と立ち枯れている。それを最もよく表しているのがIIIにおける次の詩言である。

〈ぼくらは抱きあったまま窓のなかに立っている、
みんなは通りからぼくらを見まもる〉

ただこの語句から言えることは、上下の表裏感覚は倒立して内外の領域性に変容しているということだ。

「自然との一致を目指し日本文化には領域を曖昧にする空間認識がある」と原広司はその著書『空間〈機能から様相〉へ』のなかで説いているが、詩言の「抱きあったまま窓のなかに立っている」は外と内の中間に主体を設置し、そこに主体を設定するがゆえに境界としての領域が破壊される。

つまり内と外の境界となる窓に主体が存在するということは、その境界自身が内となり、それ以外の空間は全て外となる。従来の内と外は共に〈外〉と認識されざるを得ない。しかし〈窓〉という限りにおいては、そこを境としての客観的な内外は存在するのだから、いったいどこが内で、どこが外なのか、識別不能となる。境界の曖昧さはここに発生する。

一方、文化人類学者のフロベニウスは「西洋の文化形態は外に向かう空間意識をもつ」と述べた。その点から考え、ツェランは西洋の文化形態の志向性から逸脱しているといえよう。むしろ日本的志向性つまり自然回帰的な側面を持つ。

6. 詩と空間領域

フロベニウスの言う西洋的な空間がもっぱら外に向かう空間であり、それに対して砂漠の空間が内に向かう空間だとすれば、日本人の空間は山なみを境界にして内と外とを均等にもつ空間だと言える。(山崎正和『文化と環境と芸術と』)

山崎は日本人の空間意識を内と外を均等に持つと考えるが、その境界に関しては次のように記している。

個々の(日本の)建築を見ればその構造がはるかに柔らかであるのは明らかである。柱や壁の基礎構造がきゃしゃであるのはいうまでもなく、縁めぐらし、開口部を大きくした設計は、建築を外の空間に向かって開いている。

(山崎正和／著書名・同上)

以上の山崎の見解は原広司と同様に境界についての脆弱性を述べている。これらの山崎の説を総合すると日本的空間意識は「内と外を均等にもつがその境界に関しては弱くあいまい」であるということになる。

ツェランのIIIの詩も、この空間意識と類似性をもつ。〈窓〉という内外の空間認識がありながらもそこに主体を位置させることで境界をあえて曖昧にする。自然に帰一しようとした日本人の意識構造と構造単位でみれば、同一の形態をIIIの詩は具していると言えよう。ただこの詩が特徴的であるのは、〈夢〉を詩中で語ることによって表裏の二次元性をベースにし、そこに内外の領域的三次元性を導入して多次元空間を形成しているところにある。ツェランの詩的宇宙である。

7. 文化世界に潜む詩的感性の問題

今、詩は初めて“荒地”に足を踏み入れ、文化との闘争を開始した。難解、または無理解のもと

に抹殺される詩群は、世界のみならず人間の本質まで革命する手法を手に入れようとしている。果たしてそれが、意図されたものか否かは別として。文化悪に侵された人間に原自然を呼び醒まし、あるいはそれを失わぬために。

そこで重要なことは、幾度となく繰り返しているが、表に密接する背後の存在である。日常生活のなか「どこかで感じていながら、常に意識化されないもの」。当然それは表層と完全に乖離している深層ではない。

詩が、ここに位置したばあい、社会性を喪失し〈失われた原自然〉を啓発し得なくなる。よって深みに納まることなく、最短距離の「背後」すなわち、表と一体化したスタンスをとらねばならない。したがって一まったく見たことも聞いたこともないが、しかしどこかで認知している—という〈詩感〉が必要となる。これは、新感覚派のような文化的了解を容易に得られるものでは決してない。

〈ただ純粹に感じきるもの。〉

これに形象を与え、意識世界に開示する。もちろん、非存在の形象化であるがために、直線的理解は得られない。だが逆に無理解のなかで〈どこかで感じ、見ていたもの〉という感得がなされ、意識の〈背後〉との交信が開始される。かろうじて意識で知覚される、まだ未開拓の〈主体＝原自然〉である。

詩人は、この感覚をもとに定型化した〈外界の死〉のなかから、プロト-ナチュラルを捉え、あるいは逆に〈背後(実はこれこそ表なのだが)の生〉を共感し詩を形成する。詩における必然が、顕在化する決定的瞬間である。

8. 話をする猫

次にL. マンフォード著『人間—過去・現在・未来』のなかから言語の詩的機能を取り上げてみたい。

「コトバ的と図形的という記号体系のはじまりをひとたび手に入れると、人間は生物からの離脱と前方への空想的描出の公式的器官を獲得した。人間は、経験の広い領域を会得し、過去と未来、近きものと遠きものを共通の場のなかへ取りこみながら、彼の意識のなかに、経験を統一して残しておくことができるようになる。こうしてまた人間は、このように一つに束ねあげられた資材を使って、発生の直接的機会が消滅したあとにも、自分の最初の直感を取り戻すのに十分なほど永続的な諸形式のなかに自分の内面を表現できるようになった。とりわけ、かつてのコトバの不思議は、今日の原子の不思議よりもはるかに魅惑的に人間の生活全体を充たしたにちがいない。なぜなら、名づける行為は、神の業にも似た過程、すなわち第二の創造であったから。かつて人間が名前というものを手に入れたとき、名前がそれだと指示する対象を自由に支配できると思えた。他のどんな動物も、こうした能力をもったものはいない。これは、ただの思考能力だけではなかった。創造する力であり、生命の呪術的息吹であった。その助けにより、自然の必然性に、人間によってのみ見ぬかれる可能性が付け加わった。原始人が文明の次元を達成したあととまで、彼らは名前が神々しいまでの自己同一性の本質であり、命名する行為と創造する行為とは同じ一つだと考えたとしても、それは少しも不思議ではない。

この業績がこれほどすばらしかったために、われわれの時代にいたるまで、人間は、コトバの呪術をそれが役立たない領域にまで通用しようとはせず試みてきた。コトバは、棍棒としてではなくとも、ヒキガネとしての働きをしながら、人間の行動のなかに、しばしばいろいろの変化をもたらしたために、原始人は、このヒキガネ的力を非人間的対象にも同じように当てはめようと試みた。

雲や樹木も生きていてのではないか。コトバの呪術によって、人間は、雨や豊作を招きよせ、健康やエネルギーを勝ちとれるであろう。かりに最

近の心靈学（たとえば隔動現象、念動作用）の実績が十分に検証されうるとしても、このやり方が、なまの物理的環境に変化をおこす上でもっとも無効な方法であることには、ほとんど疑いをいれない。だからこそ、この呪術は消え去る運命をもった。」

以上の引用のなかで、「原始人は、このヒキガネ的力を非人間的対象にも同じように当てはめようと試みた。雲や樹木も生きていてのではないか。」と記している。この〈ヒキガネ的力〉こそ、言語の文化媒体としての異質さを排除する大きなポイントとなる。逆の言い方をすれば、詩的言語が文化悪からのがれ、自然を回復することにつながる。いわば自然対象との境界を不鮮明にする力といえるであろう。本来、自然から生まれた言語が当然のごとく持ち合わせた「生命の呪術的息吹」（引用文中の句）は、現代詩に内在する。先述した詩感こそまさしくそれである。

又、L. マンフォードは同著でこのようなことも言っている。

「赤ん坊時代、言語が始まるのは、たしかに単純表現として、情動の共有様式としてである。そしてこの始まりは、言語がそれ以外の用途をもつようになる、ずっと以前からである。社会的結合に役立ち、共通の知識や分担された行動の分野を拡大させるという、言語の多くの他の機能の底部で、言語は、情動的連帯を促進する役目をもつ。言語は、人間や事物をあれこれとして確定し、身許をたしかめ、認知することを可能にする一つのきずなである。耳なれた語群を使いながら、正しい口調と抑揚で言語を話すひとびとは、同族のひとびとであり、隣人であり、仲間である。すなわち信頼のおけるひとたちである。そうでないひとびとは、同族のヨソモノであり、敵である。すなわちせいぜい、おかしな連中であり、古代エジプト人があからさまにそう感じたように、ナミの“人間”

ではない。こうして、この最も深いきずなは、やがて人間の種族や人種を相互に隔てるもっとも大きな障壁の一つとなった。あまりに深く経験の個性がしみこんでいるため、話コトバは、人間のもっとも普遍的な作品でありながら、人類の統一への一つの障害となった。」

「話しことば」が擬種形成の要因の一つになっていることは間違いない。人間の種族や人種のみならず、人間との共通言語を持たない動物の類に対しては、なおさらこの傾向が顕在化する。「話しをする猫」が登場（人間社会で活躍）した場合、猫そのものへの擬種は変わらないとしても、「発話の猫」への生理反応はずいぶんおだやかなものとなるだろう。とはいっても、L. マンフォードも述べているように、話しことばや日常言語の記号的容態を保ちなが、言語は呪術的息吹を内在する。それは人間も同様で、表層意識の背後にこそ非文化的生命は息づいている。「話しことば」によって擬種が発生するなら、「呪術的言語」でそれは解消する。

言語そのものの自体に数種の機能が内在すると考えた L. マンフォードは、呪術的言語の位相までには言及していない。しかし、間違いなく言語には非文化的機能があり、それが自然とのコミュニケーションをなさしめるものと考えていた。もし彼が原初（近自然状態）の言語の機能の一つに「詩」を数えあげていたとしたら、詩感は通時的意味をもち、それは、現在無理やり作られた存在ではないということになる。彼の唱える「呪術的息吹」が「原初の歌」であることは明白だから、今述べた仮説は証明するまでもなく一つの重要な命題となろう。と同時に原初の歌は現在から見れば、非常に“難解”だということだ。ただ、それは文化的理解としての判断であって、時には自然への通信不能を意味する。前章で述べたとおり、自然との通信機能となる詩感は、文化的視座から“難解”として判断される。ところがそれは、コミュニケー

ト不能な“難解”ではないから、無意識層に位置するわけではない。言語は表層的言語（話しことば等文化的理解）と呪術的言語（詩感）に分離しているわけではないので、表層では理解できない表層の一面、すなわち背後に「詩感」は位置することになる。つまり前章の「詩感の位相」そのものである。

9. おわりに

詩感と修辞法との問題は、一長一短に語れるものではない。だがここで、ある種の感性連鎖のようなものを看取できるであろう。

直喩（シミリー）——直接感得したものを、直接表現しえぬがために他によって喩える。シニフェとシニファントの十分な一致が見られないもの。リアリズムの意識が強いために起きる表現。反詩感。

暗喩（メタファー）——これはシミリーのような不一致感はない。むしろリアリズムを超える手法の切り札ともなる。詩がメタファーであるとされる所以。詩感。

擬人法（プロソポピーア）——擬種が自然に排除されようとしているもの。詩感。

迂言法（ペリフラシス）——紆余と曲折を用いた表現はむしろ、詩感の直接表現として機能している場合がある。詩感的なもの

代称（ケニング）——刻々と変化する自然の容態を詩感と創造力によって表現し分けたものも含まれる。詩感。

頭韻（アリタレイション）——これは対象を表現する場合のリズム。近似化した自然のイメージの連鎖と混沌。詩感的なもの。

Fair is foul, and foul is fair :

Hover through the fog and filthy air.

（シェークスピア『マクベス』）

疊語法（エピジュークシス）——山間地における繁茂する樹木は疊語に安定感を与える。詩感。

首句反復（アナフォーラ）——アナフォーラは単純な自然から感得したパターン。詩感的なもの。

結句反復（エピフォーラ）——エピフォーラは自然界で目的に向かって行動するパターンから生まれたものか。獲得しようとする動物を追うとき、状況は変化しても目的は同一のため。これはアナフォーラにも言える。同上。

前辞反復（アナディプロシス）——混沌とした自然界における位置認識や秩序化の初発認識か。反詩感的なもの。

フィギュール——リアリズムに犯されていない、自動的な認識。詩感。

パリソン——豊語法の発展形態。

イリコロン——パリソンと同様。

対句——自然界で識別される対立化した構図。

文化的な表現。反詩感的なもの。

羅列——自然の容態。詩感。

連辞省略（アシンデント）——自然の連続にとりたてた接続部はない。詩感。

誇張法（ハイパーボリ）——人間と原自然のサイズの区分けがされず同一化する。詩感の尺度ともいえる。ただし、低いレベルでのそれとなる場合もある。詩感。

緩叙法（マイオウシス）・曲言法（ライトウティーズ）——これもハイパーボリと同様で文化尺度の反措定となる。詩感。

換喩（メトニミー）——これも連想域にとどめられているものはいいが、属性の強いものは文化性を持つ。詩感的なもの。

撞着語法（オクシモロン）——自然の混沌の近似表現である。詩感。

擬声・擬態語（オノマトピーア）——すべてを音として捉える点において直接感覚性が強い。詩感的なもの。

パロディ——その使用法によって変化するため詩感的なものとして位置づける。

各修辞法における詩感の感性連鎖は、修辞の枠に納まりきらない“ひろがり”をもつ。よってレトリックの網がかえって詩感のダイナミズムを抑制し輪切りにする。今、我々が捉えなければならぬ枠は、自然という無尽蔵な規制である。だが詩感を一定の概念で輪切りにする意味がまったくないというのではない。ここで最も言いたいことは、本体（詩感）そのものの実体を指し示さずして、分析ばかりに終始する行為は、本末転倒もはなはだしいということなのである。

引用・参考文献

- 1) 河合雅雄ほか 1983「日本人の精神構造に今なにが起きているか」講談社
- 2) 河合雅雄 1979「森林がサルを生んだ 原罪の自然誌」平凡社
- 3) 河合雅雄ほか 1993「マザーネイチャーズ・トーク」新潮社
- 4) 河合雅雄 1974「ニホンザルの生態」河出書房新社
- 5) 河合雅雄 1992「サルからヒトへの物語」小学館
- 6) 河合雅雄 1990「森の歳時記」平凡社
- 7) 河合雅雄・沢田允茂 1980「動物と人間」思索社
- 8) 河合雅雄 1980「サルの目ヒトの目」平凡社
- 9) 中谷拓士 1985「反リアリズム論：ロブ＝グリエをめぐる」創元社
- 10) 白井浩司 1977「ロブ＝グリエ、ビュートル」集英社
- 11) ラン・ロブ＝グリエ 1972「ニューヨーク革命計画」新潮社
- 12) 柄谷行人 1979「意味という病」河出書房新社
- 13) 柄谷行人 2004「定本柄谷行人集」岩波書店
- 14) 柄谷行人 2002「必読書150」太田出版
- 15) 柄谷行人 2000「可能なるコミュニズム」太田出版
- 16) 柄谷行人 1996「差異としての場所」講談社
- 17) 柄谷行人 1995「終焉をめぐる」講談社
- 18) 柄谷行人 1994「シンポジウム」太田出版
- 19) 柄谷行人 1991「反文学論」講談社
- 20) 吉本隆明 2003「現代日本の詩歌」毎日新聞社
- 21) 吉本隆明 2001「日本近代文学の名作」毎日新聞社
- 22) 吉本隆明 2001「心とは何か：心的現象論入門」弓立社
- 23) 吉本隆明 1993「詩人・評論家・作家のための言語論」

メタローグ

- 24) 吉本隆明 1997「新・死の位相学」春秋社
- 25) 吉本隆明 1995「母型論」学習研究社
- 26) 吉本隆明・北山修 1993「ここから言葉へ」弘文堂
- 27) T. S. エリオット著；白井善隆訳 2001「エリオット評論選集」早稲田大学出版部
- 28) T. S. エリオット著；ロナルド・シュハート編注；村田俊一訳 2001「クラーク講演」松柏社
- 29) 本田錦一郎 1990「T・S・エリオット研究序説」篠崎書林
- 30) T. S. エリオット著；村田辰夫訳 1986「F. H. ブラッドリーの哲学における認識と経験」南雲堂
- 31) 大竹勝 1977「イギリス文学新研究：トマス・モアからT・S・エリオットまで」評論社
- 32) 山崎正和 1993「文化が地域をつくる」学陽書房
- 33) 山崎正和 1990「日本文化と個人主義」中央公論社
- 34) 山崎正和 1988「都市開幕：国家と世界をつないで」

TBSブリタニカ

- 35) 丸谷才一，山崎正和 1987「日本の町」文芸春秋
- 36) 山崎正和 1986「柔らかい自我の文学」新潮社
- 37) 山崎正和 1979「生活という劇場」新潮社
- 38) 原広司 1987「空間〈機能から様相へ〉」岩波書店
- 39) 原広司，黒井千次 1985「ヒト、空間を構想する：都市/住居論講義」朝日出版社
- 40) 原広司ほか 2000「住宅という場所で」TOTO出版
- 41) 小林秀雄 2001-2002「小林秀雄全集」新潮社
- 42) 小林秀雄 1964「考へるヒント」文芸春秋
- 43) 清水義範 1992「世界文学全集」集英社
- 44) パウル・ツェラン 1992「パウル・ツェラン全詩集」青土社
- 45) 現代詩手帖 2003.9 思潮社
- 46) 現代詩手帖 2003.10 思潮社
- 47) 現代詩手帖 2003.11 思潮社
- 48) 現代詩手帖 2003.12 思潮社

(2005年10月11日 受付)
(2005年11月18日 受理)